学生海外調査研究		
ムラービト朝のアンダルス支配とその受容に関する研究調査		
野口　舞子		比較社会文化学専攻
期間	2009 年 10 月 8 日～2009 年 10 月 30 日	
場所	スペイン、マドリード	
施設	学術研究高等評議会人文社会科学センター付属トマス・ナバーロ・トマス図書館、スペイン国際協力庁イスラーム図書館、国立図書館	

1. 海外調査研究の必要性と目的

報告者はイスラーム史の枠組みから、アンダルス（イスラーム治世下のイベリア半島）におけるムラービト朝時代（1056-1147 年／アンダルスでは1091-1145年）に焦点を当て、王朝の支配のあり方と在地社会での受容のされ方を研究している。

ムラービト朝は、現在のモロッコを中心とするマグリブ地域に興ったベルベル人の王朝だが、当時北方のキリスト教諸国の勢力に押されていたアンダルスのムスリム指導者、法学者らの救援要請を受けたため、アンダルスに渡りそれらを平定、その後同地を支配するにいたった。このようにアンダルス出身の支配者ではなく、マグリブに本拠を置いたままアンダルスを支配したムラービト朝は外来政権とすることができる。アンダルスの歴史においては、711年に始まるイスラームの征服以降、同時代は初めて外来政権の支配を受けた時代に相当する。この外来政権の支配に対しアンダルスの人々はどのような反応を示したのか、また出自も異なる人々を王朝はどのように支配したのか。以上の問題関心から、ムラービト朝をアンダルスへと招き入れ、王朝のもとで繁栄を享受したとされるアンダルスのウラマー（イスラーム知識人）と王朝との関係に注目し研究を進めている。

というのも、ムラービト朝はウラマーであった宗教指導者のもとに参集したムラービトゥーン（修道士たちの意）の宗教的情熱によって周辺地域を征服支配していったため、その最初期からウラマーとの関係、特に同時代のスンナ派復興の一環としてマーリク派法学者との関係が指摘されているからである。また、アンダルス征服に際しては、上述の通り同地の指導者、法学者らの救援要請なども行われた。加えてイスラーム世界では、歴史的にウラマーがムスリム社会と政治支配権力の仲介者として社会を統合する機能やイスラーム法であるシャリーアの解釈者としての立場を持っていたことから、支配者は政権の正当性を確保するためにウラマーの支持を求めたということも広く受け入れられている。このように、建国やアンダルス征服当初から政権とウラマーの関係が存在するだけでなく、外来政権である王朝の支配の正当性を確保するためにウラマーの支持は不可欠であったことからも、両者の関係を詳細に検討することが肝要である。

しかしながら、先行研究は総じてムラービト朝がアンダルスで行った活動を征服、侵略といった軍事的側面から捉えるものが多数を占め、実質的な支配の側面や在地社会における支配の受容といった社会史的視座からはあまり注意が払われなかった。また、同時代には北方キリスト教諸国のレコンキスタ（再征服）が進展したことなどから、キリスト・スペイン史側でもレコンキスタやそれと大きく関係する十字軍との関わりといったテーマが歴史的に大きな位置を占めてきた。こうして、ムラービト朝史に関してはキリスト教諸国との境界やそこでの出来事を策定する作業に多くが費やされてきたのである。他方、アンダルスのウラマーについては、行政組織、職務といった制度論と個人レベルでのネットワークやキャリアの検証といった研究が別々になされ、王朝の支配との関係を視野に入れて包括的に論じたものは多くなかった。こうした先行研究における社会史の視座の欠如といった問題意識から、本研究は特に王朝の支配のあり方とアンダルスのウラマーによる支配受容という社会史の側面から分析することを目的とし、アラビア語年代記史料から両者の関係を捉えた。更にウラマー伝記集を使用し、ウラマーの経歴や活動、記述の地域的傾向を検討、分析することでアンダルスのウラマー社会の構造を明らかにした。これらの分析によって、政治史と社会史、征服者と現地住民の双方の視点を接合し、地域の全体像を照射出来ると考えたからである。

上述の研究状況のもと、自国の領域内に存在したアンダルス研究が最も盛んなスペインにおいて、改めてムラービト朝に関する最新の研究動向調査や資料収集調査を行う必要性から当該調査研究を行った。更に、ムラービト朝と同様に外来政権と位置づけられ、今後研究対象とするムワッヒド朝（1130-1269年／アンダルスでは1147-1223年）に関する文献を入手する

ことも目的とした。

2. 調査の概要

本節は今回の調査で利用したマドリードの図書館について、入館方法、入館証、閲覧、複写などの事情と、利用の際気づいた点や収集した資料の紹介をする。ただし、スペイン、特にマドリードの図書館案内としては、イスラーム史の立場から佐藤健太郎氏によって、ラテンアメリカ・カリブ研究の立場から武田和久氏によって既になされているため、そちらも併せて参照されたい[1]。本報告と詳細な図書館情報、利用方法を著している武田氏とは対象とする図書館に重複が認められるが、本報告は氏の専門ではないイスラーム史、スペイン史研究としての立場から記述する。また①トマス・ナバーロ・トマス図書館は今回の調査で最も多く利用したが、開館したばかりで実際の調査報告が未見であるため、同図書館の報告に力点をおくことなども本報告の特徴として挙げておく。図書館の所在・アクセス、歴史的背景、所蔵史資料、連絡先などについては図書館ごとに開設されている HP を参照のこと。

また、今回の調査の目的が一次史料ではなく、研究文献の調査収集を主眼としているため、手写本などの史料収蔵状況については未調査であることも予めお断りしておく。

①学術研究高等評議会人文社会科学センター付属 トマス･ナバーロ･トマス図書館

Biblioteca Tomás Navarro Tomás: BTNT, Centro de Ciencias Humanas y Sociales
URL: http://biblioteca.cchs.csic.es/

本図書館は国立の総合研究機関である学術研究高等評議会（Consejo Superior de Investigaciones Científicas: CSIC）傘下の人文社会科学センター（Centro de Ciencias Humanas y Sociales: CCHS）に併設する図書館である。同センターが 2008 年に改組し、現在地に移転したばかりであるため図書館自体はとても新しい。

入館に際しては、身分に応じた入館証（カルネ carné）作成の手続きを予めインターネットで行い、実際の入館で作成する。しかし、今回の調査ではインターネット上の不備から渡航前にカルネの請求が行えなかったため、一定期間のみ利用できる臨時パス（pase temporal）を現地で作成することとなった。臨時パスの作成にはパスポートなどの身分証明書を提示し[2]、用紙に必要事項を記入するのみで時間はかからない。尚、カルネを作成すれば国外の研究者でも図書の貸出が許可され得るが、臨時パスでは貸出を受けられない。その点を除けば、カルネとほぼ同様のサービスを受けることができる。

図書館は地下 1 階、地上 2 階の計 3 階分が開架書架と閲覧室になっている。人文社会科学センター付属の図書館であるため、基本的には人文科学・社会科学系の図書が収蔵、開架されている。学術雑誌は最新刊と過去 1 年分ほどが開架されている。この他にも学術雑誌のバックナンバー、大量の研究文献や史料が閉架書庫に収蔵されている。閉架書庫に収蔵されている史資料を閲覧したい場合は、パソコン上で請求すると 1 時間弱でレセプションカウンターに用意してくれるので、カルネやパスと引き替えに受け取る。

資料複写に関して同図書館で特筆すべきは、調査を行った 2009 年 10 月現在、それらが無料で行えることである。複写機（コピー機）は館内の各所に配置されており、複写申請も行う必要はない。また同機では、自分のパソコンのメールアドレスを入力し資料をスキャンすると、PDF ファイルとしてメール添付で転送できるサービスも無料で行われている。この他、館内にはパソコンも相当数配置されており、検索、資料請求などが容易に行える。カタログは全て電子化され、全てがスピーディーであり非常に恵まれた研究環境であると言えるだろう。（このため、図書館案内やパンフレットといった紙媒体の図書館情報は存在しないため、全てインターネット上で調べて欲しいと言われたのも印象的であった。）

人文社会科学センターに属する地中海・近東言語文化研究所（Instituto de Lenguas y Culturas del Mediterráneo y Oriente Próximo: ILC）はスペインにおいて最も伝統あるアラブ・イスラーム学の研究機関の一つといえるが、本図書館もヨーロッパにおけるイスラーム研究の一大拠点としての役割を果たすべく設立された、という旨を調査に際し同研究所の研究者よりうかがっていた。しかしながら、スペインにおけるアラブ・イスラーム研究は伝統的にアンダルスの事象を対象としていたという背景や、本調査も基本的にアンダルス史の研究文献を入手したこともあり、他のイスラーム（特にマシュリク、トルコ、イランなど）地域の研究者にとってどれほど利用できるかは今回の調査だけではいささか測りかねた。とは言え、欧米語に加えアラビア語史資料も開架されている他、閉架書庫にも相当数の史資料を有すると思われるため、アンダルスやマグリブ、スペインの歴史研究者は勿論のこと、同地域を扱う現代研究者にも利用価値の高い図書館だと言えるだろう。ただ付記しておくと、スタッフは多いにもかかわらず、また研究所付属の図書館ではあるが英語が通じないことがしばしばある。報告者はスペイン語会話に関しては若干の不安を持っていたが、必然的に図書館利用における会話力はかなり上達したと思っている。

更に、今回の調査では同センターILC 所属（アラブ学 Estudios Árabes）の、いずれもマグリブ・アンダルス史研究で活躍されている Maribel Fierro、Rachid El Hour、Fernando Rodríguez Mediano、Mercedes García-Arenal の各先生にお会いし、最新の研究動向やスペイン、モロッコの研究者情報など

を教えていただく機会を幸運にも得ることができた。特に Maribel Fierro 先生は、中世アンダルス史を代表する研究者にもかかわらず、報告者が修士論文で得られた仮説－ムラービト朝の支配におけるマグリブとアンダルスの異同または差異について－と問題関心の非常に近い論考を近年発表されたということもあり、滞在中に数回面会の機会を設定してくださった。そして関係する論文をいただくだけでなく、直にその考えを伺うという貴重な経験をすることが出来た。また、修士論文執筆時に論の進め方、方法論といった論文の枠組みに関して、最も参照した文献の著者である Rachid El Hour 先生からも、研究についてご教示いただいたほか、報告者の関心に近いモロッコ人研究者を紹介していただいた。これら第一線で活躍する研究者の「(例えば論文には表れないような) 生の声」を聞くことが出来たのは有意義な経験であり、今後筆者に直接連絡を取ることが可能になったということは本調査の最も大きな成果とも言える。調査に際しお世話になった先生方にこの場を借りて心より御礼申し上げる。

②スペイン国際協力庁イスラーム図書館

Biblioteca Islámica, Agencia Española de Cooperación Internacional para el Desarrollo (AECID)
URL: http://www.aecid.es/web/es/bibliotecas/

本図書館は外務省の外局であるスペイン国際協力庁が運営する図書館である。アメリカ博物館に隣接しており、イスパニア図書館（Biblioteca Hispánica ラテン・アメリカ文献を収蔵）と同居している。短期の資料閲覧の場合はパスポートなどの身分証明書の提示のみで入館でき、図書館入口で警備員にパスポート番号をパソコンに入力してもらい、入館証を受け取る。閲覧室では開架書架の間の各所に机が並べられており、利用者は荷物を預ける必要もなく好きな席に座ることが出来る。また室内には観葉植物やソファーなども置かれており、利用者の自由度は高い。

資料請求は、用紙に必要事項を記入しレセプションに提出すると、数十分後にレセプションカウンターに資料が置かれているので、パスポートと引き替えにそれらを受け取る。複写は 1 回につき 0.05 ユーロで、複写申請を行う必要はない。この複写機では硬貨のみ使用可能で、釣銭が出ないが、レセプションで申し出れば両替も出来る。

本図書館には手写本類はないが、欧米語のみならずアラビア語も含めてイスラームに関係する内外の刊本、新聞、雑誌の蔵書が非常に充実している。刊本については資料請求を行うが、主要学術雑誌はバックナンバーも含めて閲覧室に開架されており、こちらは大変便利である。

③国立図書館

Biblioteca Nacional de España: BNE
URL: http://www.bne.es/

本図書館はスペインにおける全ての刊行物の納本図書館である。今回訪問した図書館の中では唯一土曜日も開館しているため、土曜日を中心に上記 2 図書館で入手できなかった文献を収集した。入館証は、1931 年以降に刊行された資料の閲覧ではパスポートなどの身分証明書の提示のみで作成できる（カルネ・レクトール carné de lector）が、1931 年以前の資料や一次史料を閲覧したい場合（カルネ・インベステガドール carné de investigador）は紹介状も必要となる。

閲覧に際し、利用者はカルネと引き替えに閲覧机の番号札を受け取り、その番号の机を使用する。資料は近刊のため開架されている一部雑誌を除いて、全て請求しなければならない。資料によって請求場所が異なるが、請求用紙に必要事項を記入後カウンターに提出し、番号指定された閲覧机で待機していると資料が到着した知らせがある（総合閲覧室では机のランプが点灯、雑誌閲覧室では机番号が電子掲示板に示される）のは共通している。複写は、複写室のカウンター、または券売機でコピーカードを購入して行う。カードは数種類あるが 50 枚のカードが 4 ユーロで、複写申請を行う必要はない。また、館内は大変広く、自動販売機、喫煙所が設置された休憩スペースもある。

以上、これらの図書館において研究文献を調査収集したが、全体的な傾向としては収蔵文献カタログの電子化が進んでいるのは勿論のこと、BTNT、BNE に関してはパソコンが相当数設置されているため、インターネットアクセスも容易であり、どの館も非常に利用しやすいということが挙げられる。

繁雑になるため具体的な論文名は列挙しないが、本調査では特に碑銘、貨幣鋳造に関する論考、王朝の正当化の理論、法学書やファトワー集（日常生活に関する人々の質問に対して、法学者がイスラーム法に照らして示す法的見解をまとめたもの)、当時の思想に関する文献などを中心に収集した。また、概説書ではカバーしきれない地方史に関する論考も入手した他、ムラービト朝期からムワッヒド朝期まで時代を広く設定し、論文の渉猟を行うことが出来た。この他に CSIC の書籍購買部（上記図書館とは別住所）やマドリードの書店でスペイン語等の研究書を数点購入した。

今回の調査で印象的だったのは、研究者のネットワークが密であるだけでなく、一介の大学院生もその輪に簡単に招き入れてくれるという柔軟性、即応性であった。上述したように、報告者がどういった研究がしたい、どの様な事柄に興味を示しているかがわかると、その場で関係する国内外の研究者のメールアドレスを示し、連絡を取るようにと教えられる場面が度々あった。遠く離れた日本から学生が自国の歴史を学びに来たということで好意的に捉えら

れたということもあるだろうが、これらの背景にあるインターネットの浸透やグローバル化の進展、さらには情報伝達の早さによる研究の効率化とスピードの速さを認識しないわけにはいかなかった。

こうしたデータの電子化、図書館情報の整備によってスペインにおけるイスラーム研究の環境は一段と恵まれたものになっているが、とは言え、これが即座にイスラーム研究促進を意味しているわけではなく、国全体としての図書館整備、学術促進の一環として捉えたほうが良いだろう。スペインにおける対イスラーム認識を一言で論じることは非常に難しいが、やはりそれは両義的なものだと言えるのではないだろうか。スペインでは 2001 年の 9･11、すなわちアメリカ同時多発テロ事件に続く 2004 年 3 月 11 日にマドリードで同時列車爆破テロが起きており、またモロッコなどからのムスリム移民とそれに関係する問題も生じている。これらによって、人々のイスラームやムスリムに対する感情はあまり良いものではなく、警戒心は強まっているように見える。他方、イスラーム治下の歴史的建造物が数多く残るアンダルシーア地方では自治州政府、その外郭団体「アンダルスの遺産」財団（El legado andalusí）ら行政側からも、重要な観光資源として積極的にアンダルスの歴史をアピールする傾向にあるように思われる。事実、同地方を訪れると歴史的建造物の修復工事やイスラーム建築の再現が進んでいるのを度々目にする。また今日的な宗教問題との関係から、アンダルスにおけるムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒の三者の「共存」を積極的に訴える様子も見受けられる。このように、かつてムスリムが支配した歴史を持つスペインではイスラームに対して様々な場で様々な反応が起きているのが現状であり、個々人から学界、政府まで今後どのように対イスラーム認識が変化していくのか興味深いところである[3]。

尚、来る 2010 年 7 月には世界中東学会（World Congress for Middle Eastern Studies: WOCMES[4]）の第 3 回大会がバルセローナで開催されることになっており、開催地スペインのイスラーム研究やアンダルス研究に関しても活発な議論が行われると思われる。日本からも報告が予定されており、日本・スペイン・世界におけるイスラーム研究の交流の絶好の機会となるであろう。

3. 今後の研究計画、展望

今回の調査では修士論文執筆の際には入手できなかった文献を収集するだけでなく、碑銘、貨幣研究を始めとする考古学、発掘調査など現存するモノの研究成果も広く収集できた。このことで、今後より包括的な視点から王朝の支配を議論することが可能となるであろう。以後収集した文献を批判的に読み進めると共に、先行研究を総括し、ムラービト朝のアンダルス支配のあり方に一つの結論を出したいと考えている。これらの成果は、2010 年 5 月の日本中東学会の年次大会で報告し、その後、査読論文として投稿する。

長期的な展望としては、当時社会で問題にされていたことを知るために、今後はアラビア語史料のファトワーや法学者の理論を研究する必要があるだろう。ウラマー個々人の見解がより反映されるこれらの史料を読み込んでいくことで、彼らがどのようなことを問題にしていたのかを明らかにすると共に、問題への対応などからウラマー個々人と王朝との関係を検討していきたい。

更に外来政権のアンダルス支配の比較に関して言えば、ムラービト朝では同地のウラマーの協力は不可欠であり、これらをそのまま承認する形で支配をしいたと考えられるが、続くムワッヒド朝は同じ外来政権でも、ムラービト朝とその政権と密接に関わっていたアンダルスのウラマーを批判して運動を拡大した。結果、ムワッヒド朝は自身の王朝において独自の宗教指導者層を創出し、彼らを重用したとされている。しかし、外来政権にとってアンダルス在地の名士層であったウラマーを完全に排除することは不可能であったに違いない。こうした状況においてムワッヒド朝はアンダルスのウラマーをどのように扱ったのか、またアンダルスのウラマーは続くムワッヒド朝の支配をどう受け止めたのか。今後ムラービト朝とムワッヒド朝のアンダルス支配の異同などを検討していく。そして、これらの成果を査読論文の形で公表すると共に、順次博士論文に組み込み、本海外調査研究の成果とする。また、日本においてアンダルス研究者はまだ多くなく、ムラービト朝やその支配のあり方を扱った専論というものは見受けられないため、本研究成果によって日本のイスラーム研究の充実、延いては日本文化の充実に資することが出来ると考えている。

注

1. 佐藤健太郎「25　スペイン」小杉泰他編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会、2008 年、pp.553-554；武田和久「マドリードの史料館」『ラテンアメリカ・カリブ研究』10、2003 年、pp.51-57。
2. スペインに滞在する外国人はパスポートなどの身分証明書の常時携帯が義務付けられているが、日本人旅行者に限りパスポートのコピーでも差し支えないことになっている。今回、報告者は身分証明書の提示が必要な入館等の手続きを全てパスポートの原本で行ったが、警備の方にもコピーでも構わないと言われたことがあった。（参考）外務省海外安全ホームページ（スペイン、安全対策基礎データ）http://www.pubanzen.mofa.go.jp/info/info4_S.asp?id=161（最終閲覧 2009 年 11 月 19 日）
3. アンダルスを対象とした研究と学界動向については邦語でも詳細に検討されている。佐藤健太郎「近現代スペインのアラブ学―「アンダルス」あるいは「ムスリム・スペイン」へのまなざし―」『現文研（専修大学現代文化研究会）』

80、2004 年、pp.2-19；黒田祐我「アンダルス社会から封建社会へ―農村社会構造研究とレコンキスタの新解釈―」『史学雑誌』第 118 編第 10 号、2009 年、pp.62-86。

4. WOCMES ホームページ http://wocmes.iemed.org/（最終閲覧 2009 年 11 月 24 日）

参考文献

黒田祐我「アンダルス社会から封建社会へ―農村社会構造研究とレコンキスタの新解釈―」『史学雑誌』第 118 編第 10 号、2009 年、pp.62-86。

佐藤健太郎「近現代スペインのアラブ学―「アンダルス」あるいは「ムスリム・スペイン」へのまなざし―」『現文研（専修大学現代文化研究会）』80、2004 年、pp.2-19。

佐藤健太郎「25　スペイン」小杉泰他編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会、2008 年、pp.553-554。

武田和久「マドリードの史料館」『ラテンアメリカ・カリブ研究』10、2003 年、pp.51-57。

のぐち　まいこ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻
日本学術振興会特別研究員（DC）

【指導教員のコメント】

アンダルス（イスラーム政権下のイベリア半島）の歴史・社会については、イスラーム政権のもとで、住民のアラブ化・イスラーム化が進むとともに、キリスト教徒やユダヤ教徒との共存関係が維持され、建築、思想、科学といった諸方面で独自の文化が築かれた。やがて、キリスト教（カトリック）精神をかかげたカスティリア王国のレコンキスタ運動（国土回復運動）が進展し、1492 年のグラナダ王国（ナスル朝）の滅亡によって、イスラーム政権は消滅するが、スペイン帝国下でも、アラブ・ムスリムはマイノリティとして存在しつづけた。このような歴史をもつアンダルス・スペインは、政治文化の点からも文化交流の点からも、歴史的重要性がある。

その研究には、アラビア語やラテン語の史料に加えて、欧米諸語やアラビア語での研究文献の蓄積がある。このため、日本で原典史料を用いて研究をするものは少なく、古くは前嶋信次のコルドバ研究が嚆矢といえるが、アンダルス史を専門とする研究者としては現在でも数名にすぎない。他方近年は西洋史からの研究者も現れている。

今回の野口さんの文献調査によって、スペインでのイスラーム研究が活発で、また図書館といったハード面での整備が進んでいることが明瞭となった。アンダルス史研究者に面会し、史料や研究の視角を知ることができたことは、PhD 論文での視点を定めていくというだけでなく、生涯のアドバイザーをえたといえるだろう。報告書の文面からも、研究の一線にふれたという高揚感が表れている。インターネット時代の今日、海外の図書館から電子媒体で文献や資料を入手することも可能になっているが、研究者という人間にふれ、そのバックグラウンドを理解できる機会となったことは、現地調査ならではの成果といえる。また、日本人の大学院生がはるばるスペインにきて、アンダルス史研究の関心の所在を伝えたことは、広い意味での現在の日本文化の発信といえる。

（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　教授　三浦 徹）